

- ソン・フェスティバル・レポート -

クラベ・イ・ガラパゴ

太田みちこ

2008年4月

Bienvenidos! <ようこそ! >

ソン発祥の地、サンティアゴ・デ・クーバ市（キューバ共和国）で毎年3月15日～19日まで行われている国際フェスティバル『Festival Internacional de la Trova 'Pepe Sanchez'2008』に私の主宰するバンド「Clave y Galapago」（クラベ・イ・ガラパゴ）の四人で、招待公演に行ってきた。

このフェスティバルは、キューバ最初のボレロ「Tristezas」を作曲、キューバ歌謡の基礎を築いたと言われる“ペペ・サンチェス”を称えるため、彼の誕生日に合わせて毎年開催されている国際音楽祭。キューバの国内外からトロバやソンという伝統的なキューバ音楽を演奏する為に数えきれない程のバンドが集まる盛大なイベント。（今回に関しては 外国人バンドは私たちだけで出演者はキューバのバンドばかり）連日、昼も夜も沢山のアーティストが、ライブハウス、コンサートホール、映画館、パティオ（中庭）学校、小さな家のような完全アンプラグドで行う普通の家のような会場まで、計10箇所くらいの会場で演奏を行う。

私は、2004年にこのフェスティバルを聴く為に初めてサンティアゴ・デ・クーバを訪れ、伝統的なキューバ音楽の素晴らしさをあらためて肌で感じ、強烈な衝撃を受けた。時差ボケと戦いながらも、寝る間を惜しんでライブ会場を回った。（ステージにかぶりつき一番前の席で、ビデオの撮影をしながら寝てしまい、それを心配しながら演奏するミュージシャンが写っている映像は今でも宝物...）そして昨年10月、この素晴らしいフェスティバルの招待状が『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』の映画でも有名になった“エリアデス・オチョア”氏から届いた時は本当に信じられなかった！！

喜びもつかの間、そこからはフェスティバルに向けての準備。

社会主義国キューバではミュージシャンも公務員。彼らは昼も夜も毎日、音楽に溢れた生活をしている。朝は8時から街角で大音量でコンパルサ（お祭りで練り歩く為のパーカッションが中心の音楽）のチームやクラシックの楽団が練習していたり、夜は夜で夜中の2時まででもライブハウスから大音量の音楽が。気候は1年を通して殆ど夏。暑いので、練習もライブも演奏する時は建物の窓を開けっ放し。その音楽に合わせて、通りがかりの人が足を止めて自由に踊ったりもする。

朝だって夜中だって、音がうるさいなんて、文句をいう人は誰もいない。家に帰って眠ろうとすると、鶏の鳴き声や車のクラクションの音が朝までひっきりなしに聞こえてきたり・・・。サンティアゴはそんなふうに、ミュージシャンに優しい街だ。

そういう環境で、地元ミュージシャン達は、昼は練習、夜はライブ。連日そんな生活をしている。その百戦錬磨の現地ミュージシャンとステージを共にする国際フェスティバル。ちょっと想像しただけでも、凄いプレッシャーだった。

日本にいて、音楽で生活をしていると、みんなが個々の活動をし、いろんなジャンルの仕事を取っているので、スケジューリングが難しい。

「クラベ・イ・ガラパゴ」ではリハーサルを押さえることができるのは月に1～2回が限度。サウンドを固めたくても、なかなか数をこなせない。それぞれに練習はできても、それだけではサンティアゴのバンドのように、サウンドが固まらない。

仕事に追われながら容赦なくフェスティバルの日程は迫る。途中逃げ出したい気分になったけれど、と

にかく自分でできることをできる範囲でやるしかない。

もしかしたら他のメンバーも、同じ気持ちになっていたかも...？

だけど「クラーベ・イ・ガラパゴ」のみinnでサンティアゴのステージに立ちたい！その気持ちの方が遥かに大きかった。それだけでもとても意味のあること。やれる事をやれるだけやろう！

この情熱はきっと伝わるはず！そう信じてキューバに向かった。

今回の旅では5日間のフェスティバル中、4日間演奏させてもらうことができた。

【初日 15日】は有名なカサ・デ・ラ・トローバの二階にある「サロン・デ・ロス・グランデス」での演奏。エリアデス・オチョアの妹“マリア・オチョア”のバンドや「ロス・フビラドス」というバンドとジョイントさせて頂き、なんと私たちがその日のライブのトリ?!会場は満席。ベランダまで人が溢れている。初めてのサンティアゴでのステージ、みな暖かい声援を送ってくれ、(声を枯らせて応援してくれたスタッフの人がいた)手拍子に踊り、想像以上に客席はヒートアップ！盛り上がってみな楽しんでくれた。

今回の演奏に向けて準備していった新曲『涙そうそう』のスペイン語バージョンもみんな喜んで聴いてくれた。歌いながら、ついに地球の反対側まで来て、サンティアゴのステージで歌っているんだ、と思ったら感激して泣きそうになり、途中声が詰まって歌えなくなりそうになったけれど、ちゃんと歌って気持ちを精一杯伝えなくては！と我慢して最後まで歌った。

ステージ終了後に聞いた話だけれど、客席に応援に来てくれていた日本人の何人かの方が泣いていたとのこと。本当に嬉しかった。

【二日目 16日】は「パティオ・アルテックス」こちらの会場はその名の通り中庭が会場となっている小さなライブハウス。夜空の下で気持ちよく演奏させてもらった。

ジョイントさせてもらったバンドがプログラムの名前と違っていただだったので名前が確認できなかったのだが、女性と男性のツインボーカルでスタンダードなソンを演奏する良いバンド。そのバンドが1ステージ目と3ステージ目。私たちが2ステージ目という感じで演奏した。

ステージが始まったばかりは客席もまばらでちょっと寂しい感じだったのだが、2ステージが始まる頃には満席！

客席には、昨日、来てくれてファンになってくれたお客様や、“マリア・オチョア”の姿も。この日は少しメニューを変えて、“コンパイ・セグンド”のナンバー「マクーサ」などもベースの渋谷和利とのツインボーカルで演奏した。

演奏終了後、「バンドのCDは売っていますか？」と何人ものお客様が声をかけてくれたが、まだガラパゴではCDを作っていない・・・。こんな嬉しいことを言って下さる方がいるなんて、来年はCDを作ってまたフェスティバルに来るしかないね！とメンバーと盛り上がった。

【三日目 17日】は「カサ・デ・ラ・ムシカ」こちらはキューバの国内のどの街にもある老舗ライブハウス、日本で言うところのブルーノートのような会場。

立ち上がって踊る人も殆どいない。(聞いたところによるといつもそういう感じの場所とのことだった)

前日の二日間とは客層がだいぶ違った雰囲気、メンバーに緊張が走る。この日はトップバッター。また、この日ジョイントさせて頂いた2つのバンドがとにかく凄い！映画「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」でもお馴染みの“コンパイ・セグンド”のバンド『グルーポ・コンパイ・セグンド』

コンパイ・セグンドは残念ながら5年前に亡くなっているのだが、彼の伝統がしっかり受け継がれている素晴らしいバンド。

コンパイの息子さん達もベースとコーラスで、参加していた。そしてもう一つのバンドは、ソング初めて歌われた頃から続いている、メンバーの殆どが家族という歴史あるバンド『ファミリア・バレラ・ミランダ』こちらもとても洗練された素晴らしいサウンド。

フェスティバル実行委員会からもらったスケジュールを見て、この二つのバンドとジョイントできると知ったとき、思わず、おおーっ！と驚きの声を上げてしまった。

そして客席中央には大好きなハバナの女性歌手“マルタ・カンポス”の姿も！！近所での演奏を終え、ライブハウスに駆けつけていた。いつになく緊張した。が、客席には日本から応援に来てくれた私のボーカルの生徒達も！演奏するとステージ一番前に来て踊ってくれた。（きっと彼らも他に踊っている人がいなくて緊張していたはず）その応援してくれる姿にとっても嬉しくなり、張り切って演奏した。

【四日目 18日】は「オリエンテ大学」

こちらは朝から大学のキャンパスでの演奏。野外ステージで風がこちよい。ステージ後ろの丘にはヤシの木という何とも素敵なロケーション。4日間のステージの中で、唯一純粋に客席が全員キューバ人という日だった。

この日はTVの撮影も入って、その模様が全国に放送された。ステージに立った瞬間、客席を見るとニコニコ微笑む学生達。わー可愛らしい！演奏する前からとても嬉しくなった。

演奏が始まると彼らは授業の一環ということもあり、踊りたいけど、踊ったらいけないのかなー？！と学生達がお互いキョロキョロ確認しあっている様子がまた何とも可愛らしかった。

終始笑顔の学生達の前で、とても楽しく演奏することができた。

最後の「エル・クワルト・デ・トゥーラ」ではみんな我慢できずに立ち上がり、踊って、コーラスパートの大合唱。アンコールも盛り上がり、思い出に残るステージとなった。

演奏終了後、メンバーみんなで珍しいバナナのラムを頂く。お疲れさまー！サルー！と乾杯。甘くて美味しかった。学校の先生方がまた是非いらして下さいね。と素敵な笑顔で見送ってくれた。

今回のサンティアゴの旅は、リハーサルなども含め、全行程10日程の旅だったが、終わってみればあっという間。大きなトラブルもなく、メンバーが体調を崩すこともなく、すべてに於いて恵まれていて、本当に楽しい旅だった。このフェスティバルでの演奏は得るものが数えきれない程あった。

自分の音楽を見つめ直すよい機会になり、バンドとしてもやりたいことが沢山増えた。

民宿でメンバーと一緒に朝も夜もゆっくりと1時間くらい時間をかけて民宿のお母さんと冗談を交えたりしながら、食事をすることもできた。（まさに同じ釜の飯を食うという感じ）日本にいるとなかなかできないことのうちの一つだ。

そして何より、この旅で出会った人達みんなが、遠く日本からやってきた「クラーベ・イ・ガラパゴ」の4人を Bienvenidos!と、とても暖かく迎えてくれた。それが一番嬉しかったことだった。

サンティアゴがまたより一層好きな街になった。感謝という言葉だけでは語り尽くせない。

またきっと近いうち、沢山の恩返しをする為に、バンドのメンバーみんなでサンティアゴに私たちの音楽を届けに行きたいと思っている。

『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』 BUENA VISTA SOCIAL CLUB

1999年ドイツ/アメリカ/フランス/キューバ合作 監督：ヴィム・ヴェンダース 製作：ライ・クーダー
キューバ音楽に魅せられたとヴェンダースとライ・クーダーが綴る感動の音楽ドキュメンタリー。